

## 1 出土遺物について

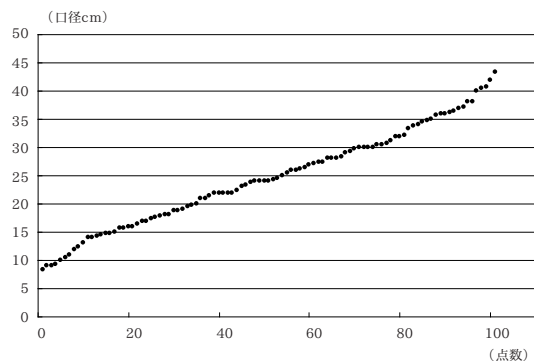
てのみとらえておきたい。鉢・壺については1点しかなく、平均を算出できなかった。口径の分布（第171図）はなだらかに続いており、断絶は見られない。直径22cm・24cm・30cmでわずかにまとまりが認められるのみである。最小径は8.4cm（注口土器）、最大径は43.4cm（深鉢）であった。

### 底 部

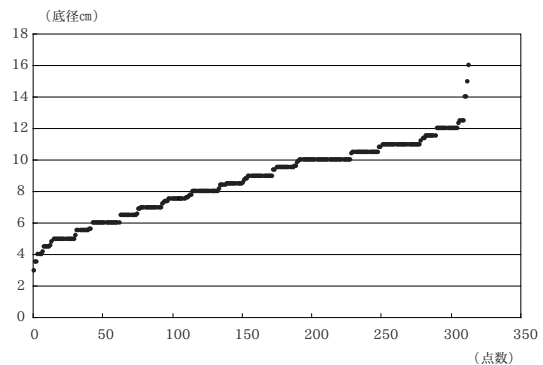
底部外面（以下、底面）からの立ち上がりが認められるものを対象とした<sup>1)</sup>。計測・点数のカウント方法は口縁部と同様である。計測数は5,223点である。残存率ごとでは完形が105点（2.0%）、1/2以上完形未満が208点（4.0%）、1/2未満残存が4,910点（94.0%）と圧倒的に多い。

5,223点の残存率による計測値は33,924で、総個体数（33,924÷36分割）は942個体分となった。この数値は口縁部よりも206個体分（128%）多い。報告遺物の総個体数は70個体分で、深鉢62個体分、鉢3個体分、注口土器が4個体分、浅鉢が1個体分、壺は1個体分に満たなかった。報告外遺物は遺物の小片が多く、器種を判別できないものが大多数であるが、確実に浅鉢・壺・注口土器と考えられるものと、それ以外を深鉢・鉢とした集計では、深鉢・鉢が841個（96.4%）、浅鉢・壺・注口土器は31個（3.6%）である。口縁部と同様に深鉢・鉢が圧倒的に多くなったが、上記の理由から深鉢・鉢とした中にも浅鉢等が含まれている可能性がある。

底径は1/2以上残存しているもの（313点）を対象とした。平均径は8.9cmであった。分布を見ると底径10.0cmのものが最も多く、次いで11cm、8cmと続く（第172図）。最小径は3.0cm、最大径は16.0cmである。



第171図 後期前葉土器の口径分布図



第172図 後期前葉土器の底径分布図

### b 「敷物圧痕」<sup>2)</sup>について

全点を観察対象として土器底面に残る圧痕を観察した。全点を対象とした理由は、残存率を一定以上としたところ、すべての種類を網羅できなかったことによる。このため、集計結果は正確な様相を反映していない可能性があることは否めないが、多くの痕跡を把握するための操作と考える。

敷物圧痕が確認できたのは5,223点中875点で、その比率は16.8%であった。圧痕の認められない個体はナデ調整されたものが最も多く、次いでケズリ・ミガキ調整されたものが少量見られた。

1) ミニチュア土器と判断できるものは除外した。ただし、径が小さく輪積み成形の個体については、小片ではミニチュア土器との判断が難しいため、除外しきれなかった可能性がある。

2) 本稿ではナデやケズリといった調整や、種実などの圧痕は含まず、編物痕や木葉痕などに限定したものである。松永篤知氏は、「土器圧痕」という用語について、広義には靱殻などの圧痕も含まれることから、編物痕や木葉痕などに限定する用語として「敷物圧痕」としている（松永篤知2008）。本報告書ではこれに従い「敷物圧痕」と呼称する。

底面の圧痕を以下のように区分した。

A 類 編物痕

編物痕は、その表現方法については統一されていないのが現状であるが、容易に想像できることを重視し「〇〇編み」という用語を使用する。定義は『下宅部遺跡 1』[佐々木 2006] に倣った。

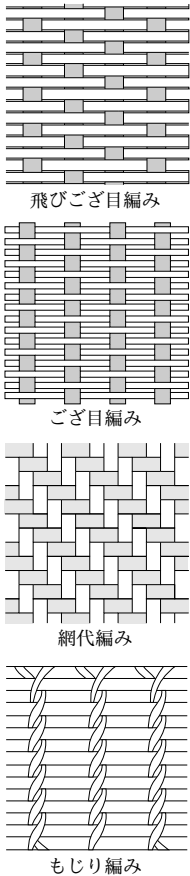
- 1 類 飛びござ目編み

ござ目編みと同じ形状であるが、ヨコ材がタテ材を 2 本以上超え潜りする技法。本遺跡では 2 本超え 1 本潜り 1 本送りのものがほとんどである。
- 2 類 ござ目編み

1 本潜り 1 本超え 1 本送りで構成される技法。タテ材の間隔に対して、ヨコ材の間隔が狭い。また、ヨコ材とヨコ材の間には隙間はほとんどない。
- 3 類 網代編み

網代編みにはもじり編み以外のものを総括する場合があるが、本遺跡では 2 本以上のタテ材を超え・潜りし、1 本以上の材を送って製作されるものを呼ぶ。本遺跡では 2 本潜り 2 本超え 1 本送りのものが多数を占める。
- 4 類 もじり編み

タテ材が 2 本単位で、ヨコ材にからめるように編んだもの。いわゆる「スダレ状圧痕」はここに分類される。



第 173 図 編み方模式図

5 類 1 ～ 4 類以外の編み方及び編み方不明のもの。

A 類の場合は細別分類が特定できなかったものが多かった。そこで「A1・2 類」という中間の分類を加えた。「A1・2 類」は、A1 類か A2 類のどちらかであると考えが特定できなかったものという意味である。

- B 類 木葉痕
- 1 類 平行葉脈

ササなどが想定される。
- 2 類 網状葉脈

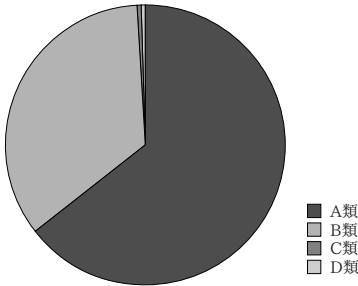
トチノキなどの広葉樹が想定される。
- C 類 縄 文
- D 類 異種類の組み合わせ

圧痕の確認できた 875 点のうち、A 類（編物痕）が 541 点（64.4％）で B 類（木葉痕）が 291 点（34.6％）と、A 類が B 類の 2 倍近い数字となった。また、A 類・B 類の 2 種類で 99％に達する（第 66 表・第 174 図）。

A 類の内訳では A1 類が 405 点（74.8％）と圧倒的に多く、A2 類は 11 点（1.3％）、A3 類は 26 点（3.1％）にとどまる。A4 類はわずか 1 点だが認められる。ただし、前述のように A 類とは判別できて特定はできなかったものが多く、A1・2 類、A 類の合計は 98 点にも達するため、この点

分 類	点数	全体比率 (%)	類内比率 (%)
A1（飛びござ目編み）	405	48.2	74.8
A2（ござ目編み）	11	1.3	2.0
A1・2	20	2.4	3.7
A3（網代編み）	26	3.1	4.8
A4（もじり編み）	1	0.1	0.2
A5（編み方その他・不明）	78	9.3	14.4
小 計	541	64.4	99.9
B1（平行葉脈）	222	26.4	76.3
B2（網状葉脈）	46	5.5	15.8
B	23	2.7	7.9
小 計	291	34.6	100.0
C 縄文	4	0.5	
D 組み合わせ	4	0.5	
合 計	840	100.0	

第 66 表 「敷物圧痕」の集計



第 174 図 「敷物圧痕」の比率

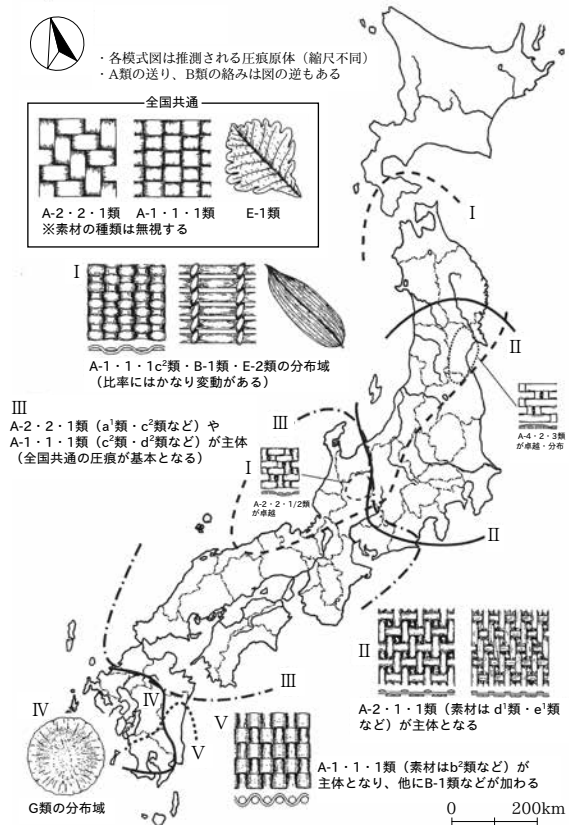
は留意する必要がある。

B 類は圧倒的に B1 類が多く、B 類中約 76% を占める。B1 類・B2 類とも、葉が異方向に重ねられたと分かる個体が数点ずつ認められた。C 類はすべて同一原体の可能性はある。節は細く、縄文 RL が施されたものとする。D 類は A1 類（飛びごご目編み）と B1 類（平行葉脈）、A2 類（ごご目編み）と B1 類（平行葉脈）の 2 種類のみである。A 類が B 類よりも上になる（つまり、A 類が底面に接する）ものが 1 点、その逆が 2 点（第 176 図 5）ある。

圧痕の種類別に底径を見てみると、A 類（編物痕）平均が 8.9cm（80 点計測）、B 類（木葉痕）平均が 9.9cm（49 点計測）で、B 類が 1cm ほど大きい傾向にある。C 類と D 類については、底径計測の対象外のため算出していない。また、圧痕のある個体の平均径が 9.4cm だったのに対し、圧痕のない個体の平均径は 8.2cm で、圧痕の残る個体のほうが大きい底径を有するという結果となった。

ここで、同様の検討が行われた村上市元屋敷遺跡の後期前葉～中葉の底部資料と比較してみたい。同遺跡では計測資料 981 点のうち、297 点に圧痕（調整を除く）が認められた。[金子・滝沢・野田 2004]。圧痕が確認できたものの比率が本遺跡では 16.7% であるのに対し、30.2% の高率である。また、A 類（本遺跡分類。以下同様）が 75 点（25.3%）、B 類は 222 点（74.7%）で、B 類が多い点で本遺跡とは異なる。C 類は後期前葉では認められないが<sup>1)</sup>、D 類は存在する。底径は本遺跡と同様の傾向が見られ、元屋敷遺跡では A 類平均 9.6cm、B 類平均 11.1cm（論文では B1・B2 類個別で算出）で、本遺跡同様に B 類が A 類よりも大きい。

本遺跡と元屋敷遺跡とでは、A 類と B 類の比率がかなり異なる。遺跡ごとでかなり変動があるとの指摘もある [松永 2008]。ただし、圧痕が残る比率自体も元屋敷遺跡と本遺跡では大きく異なる。A・B 類の比率算出方法とともに、網羅的な集計した遺跡を増加して、傾向を抽出する必要がある。圧痕の時期・地域的傾向について、縄文時代中期後半～から後期前半では「敷物圧痕」の地域性が顕著になり、東北南部及び関東甲信越地方では A1 類（飛びごご目編み）が主体となるという。また、A2 類（ごご目編み）など 1 本超 1 本潜 1 本送のもの・A5 類（もじり編み）<sup>2)</sup>・B1 類（平行葉脈）は東北北部～北陸の日本海側に特徴的であるという。本遺跡の圧痕は A1 類と B1 類が多く、松永 2008 の検討結果とは比較的調和的にも見える（第 175 図）が、土器型式との関連を含め、より多くの遺跡で資料を充実することが望まれる。

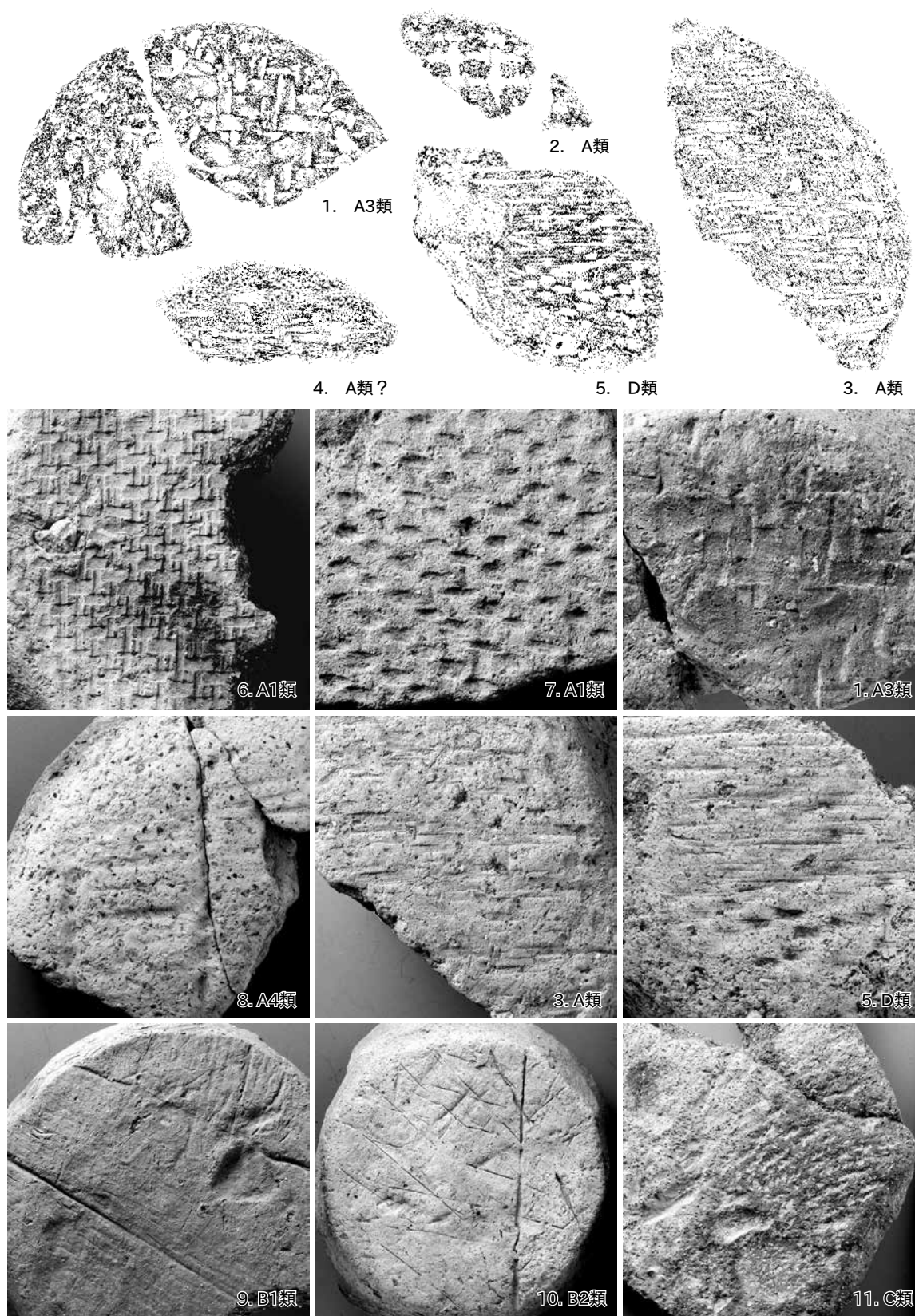


第 175 図 「敷物圧痕」に見る地域性 ([松永 2008] より転載)

1) 後期後葉～晩期前葉の資料において 1 点確認されている。

2) もじり編みについては、中期前半～中葉にかけて盛行するとのことである。本遺跡でも、最下面出土土器で数点見られる (38・58)





第 176 図 長割遺跡の「敷物圧痕」(上: 拓本 S=1/2, 下: 写真 縮尺不同)